

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究の主題は、国語科教育における能力主義パラダイムの成立過程を歴史的に解明することにある。能力主義は、1954年に提唱され、後の国語科教育を方向づけたものであり、これを解明することは、国語科教育の歴史そのものを明らかにするための重要な手がかりとなる。現在、アクティブ・ラーニングの提唱によって新しい国語能力観が求められていること、またさまざまな指導法やカリキュラムの開発によって国語能力の見直しが行われていること、などの現状に鑑みれば、本研究の役割はいつそう大きなものとなる。未だ完全に解明されていない過去の歴史を理論的・実証的に分析しながら、同時に国語科教育の現在と未来をも照射する、という意味で、高い意義と独創性を有する研究である。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究の方法は、以下の三点から当該研究分野において妥当なものである。第一に、国語科能力主義に関する多くの文献を網羅的に収集・読解し、その達成を丹念に跡づけながら自己の考察を立論していること。第二に、垣内松三、興水実といった能力主義イデオロギーの生成に大きく関わった研究者を焦点化し、彼らの認識が国語科教育のあり方を動かしていくリアルな場面を前景化させていること。第三に、教育現場の教師たちが作り上げたフォーク・セオリーに照明を当て、能力主義の生成を、制度設計を行う側からばかりでなく、教師たちからのボトムアップ的な志向としても捉えていること。これらが有機的に結びつき、能力主義の変遷を複数の視点から捉え、立体的に浮かび上がらせることに成功している。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

能力主義に関する過去の重要な歴史的資料、研究文献、授業実践の記録等は限なく収集され、分析の対象とされている。例えば第3章における終戦直後の学習指導要領作成についての分析、第4章でのフォーク・セオリーが構築された経緯の説明、第7章での文部省全国学力調査の分析、第12章での1930～50年代の教科書教材の分析などは、いずれも収集された資料が正しく読み込まれ、能力主義パラダイムの変遷を明らかにすることに貢献している。以上により、研究資料やデータの収集と分析は適切になされていると言える。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

主に1920年代から1960年代まで、各時代における「力」「能力」の概念を丁寧に実証し、それが国語科教育の研究と実践に根付いていく様相を浮かび上がらせている。占領期にCIE(民間情報教育局)との軋轢が存在したこと、経験主義のコンテクストとの葛藤が生じていたこと、戦前・戦中期の教育遺産の扱いについてさまざまな思惑が交錯していたこと、など多くのトピックが取りあげられ、それらが有機的に連係することによって説得力ある考察が生み出されている。特に、学習指導要領の作成を初め戦後の国語科教育の制度設計に深く関わった興水実という存在に着目し、ややネガティブな評価に傾きがちな興水を、肯定すべき点・批判され

るべき点いずれも含めて再評価の俎上に乗せた功績は大きい。また、これまで軽視されがちだった、無名の教師たちが構築したフォーク・セオリーを重視し、能力主義の変遷を捉える視点に導入した点も本研究の独創の一つと言える。

以上より、本研究の考察と結論は妥当なものであり、学術的な水準に十分達しているものと考えられる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

能力主義は、戦後日本人の高い学力や経済的発展を支え、現在にあつては常識とされている知見の数々をもたらした支配力の強いパラダイムである。それ故、多くの教育関係者にとって能力主義はいわば自然なものと化しており、それが歴史的・社会的に構成されているという事態に気づいていない人が多い。本研究は、その常識の根本を疑い、能力主義の理念がさまざまな時間・場・人に応じて揺れ動く様相を解明し、現代につながる戦前～戦後の国語教育史の壮大な輪郭を浮き彫りにした。多くの資料を操作し、各時代の実践と理論の両者に目配りする手堅い方法に基づき、説得力ある国語教育史研究の成果を提示した意義は大きい。

以上の点を総合的に判断し、審査委員は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位を取得するに相応しい水準にあると判定した。